

●第二節 浄土宗的立場で書かれた伝記の系譜

祐天寺には、内題に『武州荏原郡目黒聖明顯山善久院祐天寺開山前増上大僧正明蓮社顯譽祐天上人愚心大和尚傳畧記』（以下『略記』）と長いタイトルの付いた本が存在する。この本には異本（以下『略記写本』）も存在する。内容的には全く同一であるが、使用された語句に多少の相違が見られる。

これらは、その奥書によると享保五年、祐天の三回忌に記されたことがわかる。

享保龍飛<sup>ニ</sup>庚子之歲<sup>ニ</sup>中元日<sup>ノ</sup>当<sup>テ</sup>於師第三<sup>ニ</sup>之諱辰<sup>ニ</sup>釋勤息<sup>釋字ヲテス</sup>謹録

（略記）

著者の詳細については不明である。ただし、『略記写本』には釋勤息某となっていることから、書写の目的は次の『祐天寺開山大僧正実録』（以下『実録』）への原稿の役割を果たしたことが考えられる。

この『実録』が次に成立の古い伝記と考えられる。この本は二巻から成り、「完」と「附」に分かれている。「元」の内容は『略記』とほとんど同一であり、「附」にはその語句や事件の補足説明が記載されている。この『実録』も二種存在し、一つは下書き（以下『実録下書』）と考えられるもの、もう一つは清書本（以下『実録清書』）である。この二者は、特に「附」

巻に大きな相違があり興味深い。内容の検討はあとの章に譲るとしてここでは流れだけを見ていきたい。

奥書には

享保六年辛丑夏五受法之資尾張州沙門釋霖電謹識

〔実録下書〕

とあり、内容的に『略記』をもとに伝記の体裁を整えたものと言いうことができる。

版本として存在するのは、天明四年に恵海が跋文を記す『泉谷集』中に「祐天大僧正傳」が祐天寺起立祐海の伝記とともに収載されている。また、これと同文の伝記が、祐天寺六世祐全が跋文を記す『開山大僧正祐天尊者行状中興開創祐海大和尚畧傳 完』（以下『開山行状』）という表題の版本として発刊されている。跋文と奥書に

当時門人乃瞻其効驗親仰其利益而誌其德行者數篇今猶秘藏于敝寺焉最後祐全使泉

〔開山行状〕跋文

谷恵頓和尚対校潤文以成就二伝

享和二歳次壬戌春三月五日発願汲二膳写且上木現行數卷至十有五日卒業伏乞恕函

〔開山行状〕奥書

莽随喜羽翼

校刊

敬書

芝西応寺玄雅

三縁山中瑞善

とあり、祐全が祐天寺に秘蔵されていたものをもとに泉谷恵頓和尚が対校し、享和二年春刊行されたものと言う。刊行された年を比較すると『泉谷集』のほうが十八年も早く世に出ており、祐天寺にあつた資料を恵頓に早くから提供していた可能性がある。『泉谷集』は数多くある伝記や資料を集めたものであり、祐天の伝記がその一部として埋もれてしまうことを憂えた祐全が、利益の證を付記して隠居後改めて開版したことが想定されるのである。

付記とは、拾遺として載せる二事（累得脱の話と、元禄四年の門兵衛の刀難を免れる利益）で、『泉谷集』にはない。

この祐天伝（『泉谷集』）は、さらに開宗七百五十年に編纂された『略傳集』（『浄全』十九）にも収載されている。

また、これより六年遅れて『利益記』が開版されている。

文政元年に成る『縁山誌』十には、歴代縁山主の一人として「第三十六主」の項に伝記を載せる。おおむね、『泉谷集』を底本として書き下ろしているが、多少の独自性（新妻家の先祖を葛西三郎とする点や、祐天の出家のきつかけに関する記述など（三二一―二四七頁の「諸伝記比較表」、参照）も見られる。末尾に『泉谷集』の最後の部分を漢文体で引用し、『諸徳

贊』からの引用として贊を載せる。この贊は『利益記』に載せる贊と同文で、増上寺大僧正になってからの在禪のもの（文化五年）である。また、悦峰道章禪師の『書』を載せているが、これは『祐天大僧正行状記』（以下『行状記』）なる書物に出ているものと同文である。残念ながらこの『行状記』の著作成立年代は不明である。

また、明治三十九年に吉川弘文館から刊行された『続日本高僧傳』第十にも「江戸増上寺沙門祐天傳」を載せる。これは『泉谷集』を参考とし簡略化された伝記であることが記載されている。すでに講談本など広く普及した明治時代にも、僧侶の立場（著者は釋道契）から書かれたものが存在していたことがわかる。

また、全く別の系統として『磐城志料』（明治四十四年）中に郷土の名僧として袋中と並び「僧祐天」の項がある。この中には主として最勝院中興のことを載せている。

### ●第三節 広く普及した伝記の系譜

祐天の名を天下に広めたのは先の浄土宗系の伝記ではなく、ここで「普及本」と呼ぶものによることは疑いない。在世中とはかく現代まで祐天が高僧として話題になるのは、文芸として世に広まったからにほかならない。ここでは、完全とは言えないが年代順にどのような書物が書写あるいは開版されたかを追ってみたい。